

7 日目(12 月 12 日) — 福島第一原子力発電所

6 時 30 分、東京出発。ドイツ大使館の職員 2 名と通訳の女性が 1 名同行。J ヴィレッジまでは約 3 時間の旅だ。J ヴィレッジは東電が寄付して造られたサッカースタジアムとして知られている。さらに、昔も今も作業員にとって福島第一と第二へのバスの発着場でもあり、私たちもそこからバスに乗り込んだ。大事故が起きた場所まで 20 キロメートルある。第一原発を起点にした 20 キロ圏内の厳格な立入り禁止区域は解除され、赤、黄色、緑のゾーンが設定されている。赤の区域は引き続き立入り禁止、黄色の区域では日中の仕事は許されるが、宿泊はできない。ここはインフラが再整備されるべき区域となっている。緑の区域は除染された場所で、住民の帰還が奨励されている。(若者よりは老人、女性よりは男性が帰りたいと思っている)。除染とは一般的に草や灌木を取り払うことを意味する。稲田では表土が削られるか、鋤で表土が地中に埋め込まれている。汚染された自然界の物質をビニールシートで覆った広大な保管場所となって、道路沿いに並んでいる。立入り禁止区域は、放射能汚染、つまり当時の北西の風向きにしたがった楔形の地形である。途中、福島第一の 8 キロメートル手前にある赤い区域に着いた。道路は驚くほど多くの交通量がある。多くの人たちが、例えばこの区域を通れば職場への距離が短くなるなどで特別許可を得ている。この特別許可の背後に住民の気持ちに沿うという以上のものがあると私は推測する。立入り禁止区域は活気があり、普通の日常という印象を与える。つまり、そんな危険なことは何もないのです、ということだ。

ドイツ大使館の依頼により、ガイガーカウンターと線量計は持参しなかった。福島事故のあと、福島第一を訪れたドイツの政治家は私が初めてである。当初、東電は私の訪問に抵抗した。脱原発を決めた好まざる国からの福島第一への訪問者が今後も受け入れられるチャンスがあるかどうかは私にかかっている。そういうわけで、私に同行する東電社員が出す放射線量に関するデータを信頼することになった。第一原発の 1 キロメートル手前で 25-30 マイクロシーベルトと言われた。検問している警察官はここではまだ外に立っている。バスに乗っている私たちは 20 キロの走行中に 1 マイクロシーベルトを受けた。大事故の数ヶ月前に福島第一では免震重要棟が建設され、これは地震からも津波からも損傷を受けずに残った唯一の建物となり、以後唯一利用可能な建物である。福島第一の所長(その後ガンで死亡)が大事故の後に指揮を執った部屋もある。

作業員たちに少し話しかけたいかと尋ねられた。そこで私は日本的なやり方で、日本に対する私の気持ちを表し、責任の重い困難な作業に対して感謝し、彼らの健康を犠牲にしてまで仕事をするのではないように、放射線被ばくと線量計に十分に注意してほしいとお願いをした。それ以上のことはここでは語れなかった。

その後、敷地内を車で回った。靴の上に防護用の靴、防護用の手袋、マスクで装備。それ以上の装備はない。ここにもまたそんな危険なことは何もないというメッセージがある。“汚染伝播”を避けるためのカバーで装備されたバスから出ることはもちろんなかった。東電側もドイツの連邦議会議員のために、最も汚染が低いルートを探した。大事故のあった敷地を 2 時間かけて車内から見た後に受けた線量は 12 マイクロシーベルトだけだった。この数値は日本までの飛行で受ける数値より低い。東電側が用意した線量計の数値を、同行の社員は誇らしげに見せた。防護服と防護マスクを着用した作業員による屋外での作業は、最高限度が 1 時間である。しかし福島第一の所長小野明氏は、長時間働くことができないのは防護マスクのせいだと主張している。私たちは徐行しながら 1 号機から 4 号機までを走った。1 号炉と 4 号炉は建屋

に入っているのを見たが、3号機は破壊されたままのように見えた。4号機の近くで停止して、燃料棒を冷却プールから取り出しキャスターに保存するための機械設備を見た。東電社員が急ぎ立てた。60マイクロシーベルトの放射線量が高すぎるというのだ。3号機では止まらなかった。同行した社員によると、3号機付近は“数百ミリシーベルト”の放射線が出ているということだったが、それ以上の正確なことを彼は言わなかった。溶融した炉心がどこにあるか突き止められないことを私は知っているので、そのことを問いただした。その社員は、ロボットカメラは核燃料を見つけていないこと、まだ探していることをあっさりと認めた。どこに溶融した炉心があるかわからなければ、冷却できないことは当然だ。その結果放出量が上昇する。現時点で3号機が最大の問題であるのは明らかだ。

それに対して、汚染された冷却水については東電の説明では制御できているということだ。脱塩、ガンマ線に関しては除染、そして2014年の初頭からはほとんどすべての核種が取り除かれるそう。現在、新しい除去技術が試験中である。ただしトリチウムは水中に残る。除染が終わったとしても、トリチウムの残った水の貯蔵が続けられなければならないだろう。トリチウムは長い間過小評価されてきたが、例えばDNAに取り込まれる可能性がある。

ボルトの緩みが原因で漏えいが発覚した汚染水タンクは、溶接型のタンクに取り換えられる。これらのタンクには1000トンの汚染された冷却水が入るが、毎日400トンの汚染水が出ている。2.5日でタンクがいっぱいになるのだ。東電社員は、福島第一は運よく広大な敷地であり、40万トンのキャパシティを持っているという。2年後にはさらに2倍になるという。つまり東電の計算では、この方法であと少なくとも2000日は持ちこたえるというわけだ。しかし、トリチウムに汚染された80万トン水をどうしようというのだ。太平洋が最終貯蔵施設なのか。どうやらその方向に向かっているように見える。いずれにせよ、外海を守ることになるはずの港湾内のシルトフェンスの図面と建築工事計画が私たちに示された。

一日を終えての私の結論？福島第一は片付いたように見える。地震と津波と原発大事故から2年半を経て、日本の他の土地と同じように片付いているようだ。敷地内をバスで走っていると、改築、修繕、回復が進行している全く普通の建築現場のように思ってしまう。しかし、福島第一は普通の建築現場ではない。ここは3つのメルトダウンが起きた場所である。まだまだ回復の途上にすらついていない場所、日々いつ状況が悪化するかもしれない危機に脅かされている。多くの問いに答えが出ていない場所。技術と人間を限界に押しやった、そして今なお限界に押しやっている場所である。これを無視することは、人間の傲慢だ。

そして、あまりにも多くの若い男性たちが働いている場所だ。いつの日か彼らが自分自身の労働にどのような代価を払うことになるのか、だれにもわからない。